

振武台の終戦処理

高橋 健

予科6-10

区隊長
(朝霞市)



I. はじめに

平成25年の60期全国総会で、予科6中隊の区隊長高橋健様にお会いいたしました。

秩父では119号(平成25年4月号)から航士校の諸隈区隊長の戦陣日誌を連載していました。高橋区隊長は諸隈区隊長と同期の54期であったので、ご挨拶を兼ねて秩父を贈呈し、諸隈区隊長のお話をしました。当然、高橋区隊長は諸隈区隊長がマレー戦線で活躍されたことを存じあげておられました。一方、高橋区隊長は一度も実戦の経験は無かったけれど、終戦時に振武台の米軍への撤収作業の責任者として活躍されたことをお話になりました。

終戦時には60期生は振武台には一人もいなかったもので、どのようにして振武台が米軍に引き渡されたか、その経緯が知りたくて是非そのことを秩父に書いてくださるとお願いいたしました。

II. 終戦時の60期生の状況

まず、高橋区隊長のお話を紹介する前に、終戦時の振武台の状況を紹介します。

終戦日の8月15日の60期生の状況は概略次の様に、兵科によって満州を始め各地に分散していた。

1. 航空兵科

(1) 航空1次

①操縦 980名で各中隊は200名

・第一梯団22中隊(戦闘・襲撃)
一満州 通化

・第二梯団21中隊(戦闘)

24中隊(戦闘・司偵)

一新義州から鴨緑江を渡り安東を経て奉天に北上中

・第三梯団23中隊(重爆)

25中隊(戦闘)

一福知山・中部197部隊砲兵教育隊

②整備 200名 修武台

③通信 200名 修武台

(2) 航空2次 1500名 修武台

{一部は藤沢村(現入間市)等の仮設兵舎に疎開していた。}

2. 地上兵科

(1) 歩兵 1067名

一長野県北軽井沢浅間東廠舎

(2) 工兵 117名

一長野県県地区田中国民学校

(3) 高射砲 100名

(4) 通信 98名

(5) 野砲 39名

(6) 山砲 39名

(7) 重砲 30名

(8) 野戦重砲 29名

(9) 迫撃砲 59名

(10) 輜重 39名

(11) 機甲 30名

(12) 船舶 59名

(13) 鉄道 49名

一(3)～(13)計571名 相武台

(但し、相武台への米軍の進駐に備えて8月23日信州の疎開地に待避)

III. 終戦時の振武台の状況

当時、振武台には61期生が在籍していたが、61期生も空襲の激化に伴い、甲は八高線の沿線の各演習地に、乙の地上は新鹿沢、中之条周辺の演習地にそれぞれ分散

疎開していたが、乙の航空12コ中隊は振武台に残留していた。

有名な、川口事件で川口放送局を襲撃したのは61期の寄居の演習地にいた第23中隊の区隊長と生徒である。

振武台にいた61期生は8月29日東校庭で解散式を行い、翌日から逐次復員離校した。甲の寄居演習隊は同じく8月29日、越生地区に集合して解散式を行っている。

このようにして、8月30日を過ぎると振武台には数名の終戦処理部隊を残して無人の状態になった。

IV. 高橋健区隊長の略歴

高橋区隊長のお話を聞く前に、区隊長より「充実して楽しく悔いなきわが人生」という自分史を頂いたので、区隊長の略歴を紹介したい。

支那事変が始まった年の昭和12年11月に卒業式を待たずに山口中学を中途退学して、12月1日、市ヶ谷台の陸軍予科士官学校に入校。

昭和13年12月予科士官学校を卒業、仙台の歩兵第4連隊の隊付きで、満州の寧安に士官候補生として赴任。半年後の昭和14年に陸軍士官学校に入校して軍曹となる。

昭和15年9月、陸軍士官学校を卒業、見習士官として新潟県高田駐屯地の歩兵第130連隊に入隊。

昭和17年、新発田第158連隊に中隊長として赴任。

昭和19年1月振武台の陸軍予科士官学校に60期生担当の区隊長として着任。

同年3月、60期生の区隊長となる（6中隊10区隊長）。

同年10月、9区隊長を兼務。

昭和20年5月18日、6中隊の地上部隊を統合して、新鹿沢に向かう。

同年7月29日振武台で地上兵科の卒業

式を挙行。

翌日地上部隊は相武台の本科に向け出発。高橋区隊長はフリーの区隊長として62期生の入校準備の担当となる。

同年8月末～9月始め、予科士官学校の米軍への引き渡しの責任者となり、無事引き渡しを完了して、退官離校する。

終戦後は朝霞市で農業で自活、工場勤めもする。

昭和26年12月警察予備隊、久里浜の総隊学校に入校。

昭和29年自衛隊になり、福岡歩兵連隊大隊長、陸幕2部係長、旭川の地方連絡部部長、朝霞の自衛隊体育学校副校長、広島第13師団副団長等を歴任。昭和49年7月退官。退官後は東洋信託銀行に嘱託として勤務する。

このように、高橋区隊長の振武台との関連は昭和19年～20年の予科士官学校、昭和46年の体育学校時代の2回である。

V. 高橋区隊長の思い出

私（高橋区隊長）は、前述の様に、昭和19年1月、新発田の第158連隊から予科士官学校の60期の担当区隊長として、振武台に赴任してきました。

古巣の新発田158連隊は2月11日に千島の松輪島に移動するよう命令が下りました。私が尊敬していた連隊長、かわいがっていた部下達が私が拝受した軍旗と共に遠くに行ってしまうのです。60期の教育は3月からでしたので、そのことを知った私は矢も盾もたまらず皆に一目会いたいと無断で新発田に飛んで行きました。学校を無断欠勤した私は5日間の謹慎の罰を受けました。

予科に着任した時、59期担当の先輩区隊長から、教育というものは短節にやれと言われましたことが、非常に印象に残っています。私はそのことを常に考えて指導し

ました。ぐずぐずと長く教えても嫌がって聞かないから、今日なにかをやろうと思ったらピシッと行って、後は生徒に時間を与えた方がいいと言うのでした。『作戦要務令』の中の「為さざると遅疑するとは、指揮官の最も戒むべき所とす」という言葉が非常に印象に残っています。軍は人の命をあずかっています。兵士は銃砲弾のなかを突っ込んで行きます。士官は即座に判断して、手を打たなければなりません。この指導方法は、戦後もずっと私のなかの基本の考え方となっていたように思います。

59期の卒業後、同年3月より60期の6中隊10区隊長となりました。10月には稜野邦雄9区隊長が南方軍大隊長として転任したので、9区隊長をも兼務することになりました。航空が卒業した20年3月以降は6中隊の地上要員を統合して統率することになりました。

4月7日のB29の空襲によって私の同期生の大館政義区隊長(7-8)始め、教官2名、生徒9名(60期6名、61期3名)が戦死。そのために急遽、学校疎開の話が持ち上がりました。

5月18日長期疎開のため地上要員を引き連れて新鹿沢に向かいました。

新鹿沢では温泉旅館に数名ずつ分宿、浅間山麓の広大な高原を舞台に食料欠乏自給の持久戦、肉薄蝸壺による対戦車戦闘等の訓練に終始しました。5月、6月の高原は山つつじ咲き乱れ、林の中はすすらの群生、だがそんな感傷に浸る余裕はありませんでした。現地自活でカボチャを植えた覚えがあります。全く敵味方とも機影を見ることのない演習地だったので、切迫したあの時期としては別天地でありました。この一帯は今高原キャベツの産地として、蝸壺の跡など全く面影を止めていません。

毎朝、点呼後銃剣術の間稽古をした記憶があります。

7月21日に振武台に帰り、29日に李王垠殿下ご臨席の下、60期の地上要員の卒業式が挙行されました。式後会食して直ちに60期生は相武台に向けて出発しました。このとき兵科決定はされていましたが、配属部隊は未だ決まっていませんでした。

このようにして60期生を送り出した後、私は次の生徒、62期生を受け入れる準備に入りました。当時、振武台では主力の61期生の大部分は寄居方面に疎開し、61期の乙の航空だけが残留していました。

その頃、私の結婚話が持ち上がっていました。お相手は、予士校の牟田口廉也校長の秘書をしていた川越女学校出のお嬢さんでした。

手の空いたものは全て戦地に大隊長として送られ、何時死ぬか分からない状況でしたから私は気乗りがしませんでした。高級副官のお計らいによって、式は親同士が勝手に決めて8月17日の予定でした。ところが青天の霹靂、15日に突然の終戦の詔勅。私は、天皇陛下の詔勅をお聞きして愕然としました。もう何も言えませんでした。

振武台の学校本部では学校閉鎖の処理にあたり、雄健神社の取り扱いに頭を痛め、御神体を振武台碑の地下に埋めることにしました。この作業は61期生の各中隊から2名ずつ選別し、副官高木栄一少佐の指揮の下8月20日から25日の間に密に行われました。社殿から神剣と宝鏡を取り出して白布で覆い、塩を撒いて浄めた穴の中に安置しました。また、この時ご真影の取り扱いが問題になったが、その処理は高木副官に一任されたそうです。なお、これらの御神体は昭和40年12月、士官学校出身者の有志と自衛隊の手によって掘り起こされたが、神剣は半ば腐食していました。この御神体は現在靖国神社に奉安されています。当時このことは私には何も知らされ

ていませんでした。

おそらく、上層部は米軍の受け入れに奔走していた私には敢えて知らせなかった事と思います。

疎開していた61期生は、疎開先から逐次帰ってきましたが、8月29日に解散式を行い、あっという間に皆家に帰ってしまいました。私と一緒にいた区隊長や教官も殆ど地元に戻ってしまいました。私は、朝霞に住んでいたため、最後まで残っていました。そのため米軍が学校を接收にくるまで、学校の責任者をするように命ぜられました。

学校の引き渡しは9月の初めに行われました。当時は私と2名の副官（高木栄一少佐（49期）と山口輝久少佐（少候）と数名の事務官だけでした。

アメリカの責任者は第1騎兵師団のウィリアム・チェース少将で、真夜中にジープを先頭に大型輸送車に分乗した約1万人程の騎兵師団を従えて乗り込んできました。我々は軍服を着て出迎えましたが、武装解除令が出ているので、軍刀は携行しませんでした。

私は、武器庫の管理を委されていましたので、翌日から設営担当のカールバック中佐に、何千丁とある兵器の申し送りをしました。その主なものは99式小銃、99式軽機関銃、92式重機関銃、擲弾筒などとそれらの弾薬であります。

そして、最後に私の軍刀を彼に渡しました。中佐は最後まで私を軍人として立ててくれました。

その時点では被服や軍馬等は殆ど残っておらず、おそらく民間人が適当に処分したのではないかとされます。

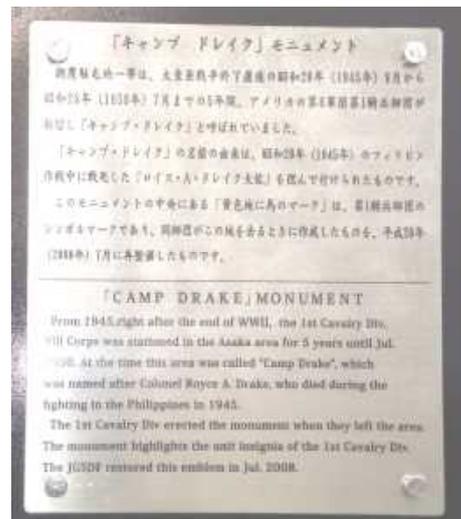
その仕事を終えた私は9月中旬には朝霞の自宅に戻りました。しかし、米軍の進駐によって、婦女子に対する暴行等が危惧されていたので、近所の若い婦女子は殆ど遠

いところに疎開しました。私の妻も秩父に疎開させました。しかし、そのような事件は私の知る限りでは起こりませんでした。

その後の話として、1ヶ月もしないうちに兵舎の火事が3回あったそうです。6中隊の兵舎も焼けました。おそらく米兵は木造の兵舎に慣れていなかったため失火による火事と思われる。

振武台はその後、マニラ戦で戦死した騎兵師団大佐であったロイス・A・ドレイクに因んで、キャンプドレイクと命名されました。

自衛隊の朝霞基地となった今でも振武台記念館の前にそのモニュメントが残されています。



キャンプドレイクの掲示板

この掲示板に書いてあるように、モニュメントの中央にある「黄色地に馬のマーク」は第1騎兵師団のシンボルマークで、同師団が昭和25年に朝鮮戦争に派遣されるため、この地を去る時に作成したものを平成20年に自衛隊が再整備したものです。



キャンプドレイクのモニュメント

私は、昭和46年に振武台内にある自衛隊体育学校の副校長として赴任して来ました。その時代、21中隊の兵舎は体育学校の記念館として、東京オリンピック重量挙げ金メダリスト三宅義信、マラソンの銅メダリスト円谷幸吉、ロスオリンピックの射撃の金メダリスト蒲池猛夫などのトロフィーや記念品等が展示されていました。

終戦当時の予科士官学校の校庭には、ひょろ長い松の木のみがそびえ立ち、殺風景な雰囲気であったが、体育学校に赴任してきた時には、桜の木が沢山茂っておりました。この桜の木は、終戦直前予科の区隊長時代に我々が苗木を植えたもので、この様に大きくなっていくことに感激しました。

体育学校は一般的な武道を教えると共に、オリンピック要員の養成所でもありました。私が体育学校の副校長をしていたとき丁度札幌オリンピックがありました。私は札幌オリンピックのバイアスロン競技役員としてオリンピックの後方支援の仕事をしたわけです。